

文学思想における退行と増殖／分断と融合＊：
在日30年の現状報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 富鎮 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027400

文学思想における退行と増殖／分断と融合*

——在日30年の現状報告——

南 富 鎮

1 問題提起

グローバル時代の文学思想は予測不可能な動きのなかにある。従来の国民国家を土台にした一国文学思想（国文学、国語）は大きく攪乱・攪拌され、静的で安定的な構造体ではなく、動的で不安定な変動体の様子を呈している。その背後には高度情報社会という嵐に渦巻く巨大な力動性がある。それはしばしば相反する力で現出される。場合には異様な退行と異様な増殖が見られ、新たな分断と新たな融合が行われ、総じて知性と反知性の相克した対立が激化されている。これが筆者の時代認識である。

本発表ではそうした力動性を日韓におけるフェミニズムやクィア文学（queer、性少数者）の連帯、増殖と退行に依拠する新たな言説などから問題提起する。意識と無意識の混合、真と偽（true、fake）の転用、増殖と退行の激しい転換が世界において同時多発的に行われている。それに韓国文学はどう対応できるのだろうか。あるいは韓国文学はすでにそうした変動の渦の真ん中に巻き込まれているのではないだろうか。もしそうであるならば、渦のただ中にいる者が自己の現住所を、方向性を、ひいては自己自身を規定することが出来るのだろうか。

以上のような時代認識で、本発表では韓国文学を在日30年の経験から自由に述べることにする。結論を無理に拵えなければならない論文という形式より自己の直感と思いを大切にしたい。やや弁解ごみだが、この時代に真実を前提する論文の「結論」など誰が信じるのだろうか。私たちはすでに真と偽（true、

* 本稿は、慶北大学校国語国文学科 b k 事業団「第6回国際学術大会」(2019.11.7)における口頭発表原稿に基づいている。原本は日本語である。本誌掲載に当たって若干の修正を行ったが、内容はほぼ口頭発表のままである。慶北大学校国語国文学科は筆者の出身母体であり、発表は韓国文学専攻の後輩たちを念頭に行ったものである。

fake) が飛び交い、それが日々に逆転する時代を生きているのではないか。論文という形式は近代言語（国民国家言語）と近代思想が作り上げた巨大な幻想の「バベルの塔」ではないかという疑いを皆はうすうす感じているのではないだろうか。副題を主観的な「在日30年の現状報告」にしたのはその所以である。田山花袋『東京の三十年』に倣ったものである。

2 『朝鮮近代文学選集』から『82年生まれ、キム・ジヨン』

2019年は日本における韓国文学の画期的な年であると言っていいだろう。それは一冊の本から出発する。チョ・ナムジュの『82年生まれ、キム・ジヨン』である。あたかも2003年の「冬のソナタ」の放映が日本や世界に与えた影響を彷彿させる。日本や世界での韓流ブームはさまざまあると思われるが、その快進撃の原点として「冬のソナタ」を抜きにして語られない。この『春香伝』のリバイバルのようなドラマが、韓国ドラマによくある交通事故、記憶喪失、貴種遊離、善玉悪玉、玉の輿、それに貞操をめぐる陳腐な「一片丹心」が世界的な反響を受けるとは誰も予測しなかったであろう。私も最初は相手にしなかった。しかし、周りがあまりにも騒ぐので教育上の口実でしぶしぶドラマを観ることになったが、これにすっかり魅入ってしまって、もしかするとこれは「そんなにわるくないかも」と思った。内心ではそう思いながらも、どうせ音楽・芸能の流行りのように一発性で終わると思っていた。韓国文化の表層的な一面ではなく、韓国文学の中心線にもっと興味が広がってほしいと思い、ちょうど刊行していた平凡社の近代朝鮮文学選集に書評に書いたことがあった。以下はその結論部分である。

以上、簡単に最近における朝鮮文学作品の日本語翻訳を紹介したが、目立つ現象は長編小説が盛んに翻訳されていることである。これほど多くの長編小説が個人によって、あるいは組織的に翻訳されることはいまだかつてなかった現象である。それはたいへん喜ばしい現象である。近年のいわゆる「冬のソナタ」現象から始まる日本人の関心が、朝鮮文学にも広がりつつあるようにも思われるからである。しかし、実際において朝鮮文学を受容する日本の読者層がどれほど形成されているのか、はっきりしない。はたして朝鮮文学の翻訳は日本で安定的な読者層（商業性）を獲得できるのだろうか。（「朝鮮文学長編小説の日本語翻訳について」『翻訳の文化／文化の翻訳』2008年3月）

近代朝鮮文学選集は平凡社と朝鮮近代文学編集刊行委員会（大村益夫、熊木勉、白川春子、白川豊、芹川哲世、波田野節子、藤石貴代、布袋敏博、山田佳子）による企画もので、日本の朝鮮近代文学研究者がほぼ一堂に結集し、長編小説を中心に3期に分けて年1冊を刊行していく壮大な翻訳事業であった。対象作品は朝鮮近代文学の主要長編をほぼ網羅するもので、すでに『無情』（2005）、『人間問題』（2006）、『短編小説集』（2006）、『太平天下』（2009）、『金東仁作品集』（2011）、『三代』（2012）、『思想の月夜』（2016）、『故郷』（2017）を刊行している。しかしこれはまだ計画の一部である。この遠大な企画が商業主義を優先する日本の出版界においてどこまで持続できるかは最初から憂慮された。それで私は可能な限り書評でも書いて応援しようと思った。朝鮮文学の翻訳など日本で読まれるとも思えなかったし、誰一人書評など書くとも思わなかったからである。じじつ誰も書かなかった。それで2013年にまた書くことになった。

以前の2008年、筆者は「朝鮮文学長編小説の日本語翻訳について」という書評のようなものを書き、いくつかの作品と訳者を紹介した。[中略] として文章の最後に「はたして朝鮮文学の翻訳は日本で安定的な読者層（商業性）を獲得できるのだろうか」という期待と不安を述べたことがある。出版状況の厳しいなか、平凡社による翻訳企画がはたしていつまで続くのか、また商業性を獲得できるのかという憂慮があったからである。当時は「冬のソナタ」現象の絶頂期で、また「韓流」なるものも流行りだしていただけに、韓国への関心が朝鮮文学にも広がってほしいと期待した。しかし、その期待はいまだに満たされずにいる。速成乱造された「韓流」は日本で人気を博し、K-POPや韓ドラと称するものが日本の表舞台で大いに活躍したが、朝鮮文学への関心は依然として振るわないままであった。日本のテレビで八等身の母国の美男美女が歌や踊りを見せるたびに、チャンネルを替えるなどした。いずれ大きな文化的摩擦を起こし、その反動で最悪のしっぺ返しが予想されたからである。幸いに、あるいは不幸なのかもしれないが、予感的中して2012年の夏から勃発した島嶼をめぐる政治問題で、日本での「韓流」はすっかり下火になった。正直、筆者はほっとしている。（「朝鮮文学長編小説『太平天下』『三代』『動く城』の日本語翻訳について」『翻訳の文化／文化の翻訳』2013年3月）

韓流ブームとほぼ同時期に、韓流ブームの反作用として日本を席卷したのが

いわゆる嫌韓ブームである。韓国に対する侮蔑で、憎悪で、呪詛に満ちた言説である。それが大概の書店（場合にはコンビニ）の入り口に山積みされている。それはむきだしの憎悪で、呪詛で、激しい攻撃性を帯びたものであった。明治初期の征韓論沸騰時や日清日露戦争期の歴史資料に溢れている言説の再現である。戦後日本にはなかった現象で、無意識の表出とも思われた。日本のもう一つの顔を目の当たりにし、当惑した。自身の無知を反省し、思想を修正し、自己を再武装しなければならない事態に追い込まれた。その最中においても朝鮮近代文学選集は刊行を続けていたが、朝鮮文学が日本で読まれている形跡は全くなかった。販売不振で、翻訳集の継続が難しいだろうと思っていた。「朝鮮関係は売れない」と言うのが日本の出版業界の常識である。しかし、もう刊行中止かと思った時に一冊が送られてきたりする。それでまたこうも書いた。

熊木勉訳・李泰俊『思想の月夜』（二〇一六年八月）は、朝鮮近代文学選集刊行委員会による「朝鮮近代文学選集」の第七巻である。波田野節子訳・李光洙『無情』が企画第一冊目として刊行されたのが、二〇〇五年一月で、ほぼ十一年にかけて第七巻までの刊行に至っている。この十一年の期間をどう感じるかは個人差があると思うのだが、日本で朝鮮文学に多少でもかかわっている人間からすると、ここまでたどり着いたこと自体が奇跡のようにも思われる。企画がスタートした頃は、すでに歴史用語化した観のある「韓流ブーム」の名残が残っていた時期だったが、その間、東アジアの政治情勢は一変し、日韓関係も大きく揺れ動いた。これに並行し、近代学問の基盤沈下と文学研究の崩壊は急速に進み、その煽りを受けて出版業界は不振を極め、本企画もそのうち、うやむやになるだろうと思った。正直、ここまで続くとは思わなかった。高度情報通信化が異様なスピードで進む昨今、日本人がわざわざ朝鮮文学を、いや、そもそも文学書を読む理由も必要性もないと思っていたからである。第六巻が刊行されてからしばらく消息がなかったので、すっかり忘れていたところ、第七巻が届いたので、内心少なからず驚いた。（「朝鮮近代文学選集」の刊行と李泰俊『思想の月夜』：音訳・二重言語・母語性）『翻訳の文化／文化の翻訳』2017年3月）

もちろん当初計画からするとまだ「道半ば」の状態で、先は長いのである。一昨年前には李箕永『故郷』（2017）が送られてきたが、伝え聞くと平凡社の企画はもう危機的であるという。要するに全く売れないのである。商業性を度外

視し、日本人朝鮮研究者の情熱と献身的な努力と自己犠牲でここまでたどり着いたが、情勢はいよいよ厳しい。言うまでもなく、出版は慈善事業ではなく、最終的には読者（商業性）によって運命が決定されるべきものである。読まないものを助成金で刊行してもどうしようもないのである。これは文学の宿命である。やはり朝鮮文学が日本で通用することは難しいことを確認した。じつは「朝鮮語と朝鮮文学は近代性を十分に備わっていない」というのが私の持論であり（『文学の植民地主義』世界思想社、2006年など）、近代的な土壌が脆弱である朝鮮文学が日本近代文学の精緻な完成に馴れた日本人読者に受け入れられるとは思えなかった。しかし、朝鮮文学のこうした低迷とは裏腹に、嫌韓本は売れに売れている。おそらく嫌韓本は朝鮮文学の一千倍や一万倍以上は売れているだろう。出版ジャーナリズムは嫌韓思想に出版不況の活路を求め、それに応じて誰もが嫌韓言説を振りまいている。嫌韓が日本人の踏絵状態化しつつある。これが現状である。

そのなか、チョ・ナムジュの『82年生まれ、キム・ジョン』が「冬のソナタ」のように現れた。それが短期間で20万部近くを売り上げ、少なくとも6か月以上も海外文学売上1位を記録し、一大ヒットになっている。この売れ行きは出版不況の日本において、それが文芸作品であることを考慮すると、一大ベストセラーと言える。朝鮮文学においてこれは奇跡に近いものである。決して達成できないと思っていたものが、ある日、突然に達成されているのである。いったい何が起きているのだろうか。

3 連帯／増殖／融合

『82年生まれ、キム・ジョン』は2018年12月の刊行から注目を受け、話題が話題を呼び、その好調な売れ行きはいまなお続いている。あたかも「冬のソナタ」の再来のような勢いである。私もこっそり購入した。そして一気に読んで衝撃を受けた。まず私は今まで一日で、一気に朝鮮文学を読んだ記憶がないのである。李箕永『故郷』は苦しみながら6か月をかけて読み終えている。それは読書というより自己試練の苦難である。ほぼ例外なく、朝鮮文学を読む行為は私には一つの苦行である。その苦しみを李箕永『故郷』の書評で書いたこともある（「李箕永著・大村益夫訳『故郷』を読みながら」『翻訳の文学／文学の翻訳』2018年3月）。しかし、『82年生まれ、キム・ジョン』は一日で、まさに一気に読み終えたのである。こうした読書経験は今までなかったので、もしかしたら「これはいけるかもしれない」「これは悪くないのではないか」と思いが生じ、「ひょっとしたら

いずれノーベル賞がもらえるのではないか」という妄想(?)まで湧いてきた。ちょうど今年の6月末、私は拙著『村上春樹 精神の病と癒し』(春風社、2019)を上梓したばかりで、その「あとがき」に春樹文学を正當に評価しないノーベル文学賞選考委員会を痛烈に批判していた。そもそも春樹論を書いた最初の動機が春樹文学を正當に評価しないノーベル文学賞選考委員会への不満からで、拙著をスウェーデンの委員会に送ってもいるが、もしかすると委員会はチョ・ナムジュのような作品を好むかもしれないと思った。

正確性にはやや疑問があるが、世間一般の評価を知るにはアマゾンの書籍情報が一つの指標として役に立つ。それで覗いてみた。アマゾンの『82年生まれ、キム・ジョン』の書籍情報には138のカスタマーレビューが付けられている(2019年9月25日現在)。ちなみに私の新作である村上春樹論は0である。その上位の1カスタマーレビューは1千を超えるフォロワーがいる。いわゆる「いいね」(役に立った)である。私の春樹論いまだに0である。アマゾンに限るが、読者の声を少し紹介する。

国が、言語が、文化が違えども、多くの国は男性を中心として建てられました。

だからこそ世界の女性はこの本を読み、共感を得たのでしょう。

もしこの本に書かれたことが被害妄想だと思われるのであれば、兄妹や女友達多数に聞いてください(1480人、抜粋引用)。

この本がベストセラーになる韓国が羨ましいです。

『82年生まれ、キム・ジョン』に描かれている事は、多くの女性が日常的に直面し打ちのめされ感覚が麻痺しそれが普通になってしまう程の絶望です。日本でも多くの人に読まれるといいなと思います。(749人、全文)

女性の人生に関する文学。

現実を考えると内容が重いかウェットなわけでも決していない。

これを不幸ポルノと言っている人の方がまだ現実感覚がないのだろう。

女性と男性が社会で生きている以上、どこの国でも通じる内容。

この本自体は必ず日本で愛されなくても別にいいと思うが

この本のような位置や影響力を持っている文学は、日本にも絶対必要だ。

最近のニュースを見れば見るほどそう思う。現在の子供達のためにも。(596

人、全文)

上記のような評価が138も続いている。それに大小の書評も多くあるが、評価は概ね三つで要約できる。「これは世界共通の問題である」「これを日本女性はぜひ読んでほしい」「日本男性もこれをぜひ読んでほしい」である。おそらく他の国でも同様な現象が起きているであろう。日本という固有名詞をそれぞれの国に変えればよいのである。上記のカスタマーレビューのなかには、「この本がベストセラーになる韓国が羨ましいです」ともある。それを749人（おそらく女性？）が支持している。これには韓国の男性としてさすがに恥ずかしい。恥の上塗りになるので否定さえできない。世界のことはさておき、日本女性にこれほど支持され、共感されていることは、日韓の女性に共有するなにか枯渇した希求があったからであろう。内面欲求がもたらした連帯と融合である。女性性をめぐる切実な思いにおいて日韓は共感し、連帯し、融合し、言説は増殖しているのである。この現象をどう解釈すればよいのだろう。



『82年生まれ、キム・ジョン』(2018)



『韓国・フェミニズム・日本』(2019)

日本フェミニズムの先駆けである『青鞥』が創刊されたのは1911年である。アジアにおけるいわゆる新女性の誕生である。アジアにおける近代女性の誕生とも言えよう。日韓併合の翌年である。女性をめぐる言説において日韓の時代的落差は大きい。金東仁『ジャガイモ』が発表されたのは1925年で、周知のように、女主人公の福女は売春を余儀なくされ、身を中国人に売られ、最後は鉈で殺害される。それより十年も前に、平塚らいてうは「元祖、女性は太陽であった」と近代女性の自我の独立を高々と訴えた。日韓の大きな落差である。突き

詰めれば、日韓併合はこうした落差によってもたらされたのである。

しかし、現今の『82年生まれ、キム・ジョン』の日本での反響と共感、連帯、融合、増殖の勢いは旧来の落差の説明を難しくする。「この本のような位置や影響力を持っている文学は、日本にも絶対必要だ」という肯定的な評価には戸惑う。韓国文学にいったいなにが起こっているのだろうか。韓国女性作家たちはもしかすると大きな文学的成果をあげているのではないだろうか。韓国の男性にはやや食傷気味の「冬のソナタ」やほんの小娘であったKARAからスタートした韓国芸能や韓国音楽はすでに「韓流」という独自ジャンルとなって世界に定着しつつある。私も最初は冷めた視線で眺めていた。しかし、韓国のドラマや音楽はもはや世界的なジャンルと言ってよいであろう。誰もが予見できなかったことである。同様の現象を韓国女性作家たちは起こしているのではないだろうか。

日本の文芸月刊雑誌『文藝』は「韓国・フェミニズム・日本」という2019年秋特集号を組んで日韓女性作家の作品を併録した（韓国作家はハン・ガン、パク・ミンギョ、パク・ソルメ、チョ・ナムジュ、イ・ラン、日本作家は小山田浩子、高山羽根子、西加奈子、深緑野分、星野智幸）。フェミニズムという言葉は韓国・日本が仲良く挟んでいる題目である。この『文藝』特集号は『文藝』創刊以来86年ぶりに3刷となり、ついに単行本としても刊行されるという。韓国女性作家によるフェミニズム、性少数者文学、クィア（queer）文学は停滞している日本文学にも一つの可能性を与えている。私たち（男性）が知らない間に私たちは大きく変貌していたのかもしれない。私たち（男性文学、非フェミニズム文学）が政治や歴史や民主主義などという辟易するイデオロギーを大声で叫んでいる間に、もう一つの私たち（女性文学、フェミニズム文学）は全く違う場所に移動していたのかもしれない。『春香伝』のリバイバルのような「冬のソナタ」やほんの小娘であったKARAが世界における韓流エンターテインメントを作り上げたように。それぞれにはなにか世界に共通する融合性と連帯性があるのではないか。増殖していく力を潜んでいたのではないだろうか。

余談だが、昨年韓国の姉妹大学から来た一年短期留学生の指導教員になって驚いたことがある。来日して研究室に挨拶に訪ねてきた母国の男子留学生の姿に私は哑然とした。男子学生は顔を白く化粧し、眉毛を描き、赤い口紅を塗り、流暢な日本語で、私に臆面なく平然と話しかけてきた。異様な（？）光景にどう応対してよいのか分からなかった。慌てて事務的な手続きを説明し、当の韓国人留学生を返した後、動揺した私は「韓国は大丈夫だろうか」と真剣に憂慮

した。敏感な日韓関係に余計な心配事が増えるかもしれないと思って受け入れたことを後悔した。しかし、今となって考えれば、「大丈夫でないのは日本で30年も暮らしている私なのかもしれない」という思いもある。私たちは自分の知らない間に見知らぬ場所まで移動してきたのかもしれない。あるいは私が知らない間に韓国は私が想像もできない場所に移動していったのかもしれない。

4 フェミニズム文学／新しい韓国の文学／K文学

すべての歴史的エポックにはその前史と徴候があるように、チョ・ナムジュ『82年生まれ、キム・ジョン』の快進撃にも前史と徴候がある。『82年生まれ、キム・ジョン』の出現を予告し、準備する動きが水面下で密かに始まっていたのも事実である。まずこの快進撃を支えたのは翻訳者である。

私は以前に「大学教員でない専門翻訳者を朝鮮・韓国文学はいまだに一人も備えていない」と嘆いたことがあったが（「朝鮮文学長編小説の日本語翻訳について」『翻訳の文化／文化の翻訳』2008年3月）、その間、新たな専門翻訳者が誕生していた。斎藤真理子、吉川凧、古川綾子などの日本人女性翻訳者たちであった。斎藤真理子の翻訳なくして『82年生まれ、キム・ジョン』の日本での快進撃はあり得ない。原作を解体してもう一度日本語で作り直している。韓国・朝鮮文学は初めて斎藤真理子を筆頭とする最強の専門翻訳者を持つことになったのである。今後も陸続と現れるであろう。これもまた連帯による快挙である。

韓国・朝鮮文学が日本で文学商品として売れ始めたのはおそらくハン・ガン『菜食主義者』が最初であろう。2011年4月に初版が刊行され、2017年には2版4刷になっている。出版社CUONから「新しい韓国の文学」シリーズの第1巻として刊行された。イギリスのマン・ブッカー賞を受賞したこの作品を大手新聞が書評で取り上げ、優れたフェミニズム文学として称賛した。この書が「新しい韓国の文学」シリーズ第1号でもあることから、『菜食主義者』は「新しい韓国の文学」の原型にもなる。戦前期の長編小説（例えば朝鮮近代文学選集の企画）や、金芝河、高銀、黄皙英、趙世熙などに代表される民衆文学系列のイデオロギーに食傷していた日本の読書会はこの「新しい韓国の文学」に敏感に反応した。CUON社も韓国で声を挙げている女性作家たちの新感覚を「新しい韓国の文学」と規定し、旧来のものと分離している。あたかも斬新で面白い韓流の文学版であるかのように。CUON社が刊行した「新しい韓国の文学」現在19巻まで進んでいる。もちろんCUON社だけではない。書肆侃侃房の「韓国女性文学シリーズ」は現在6巻を刊行している。晶文社は「韓国文学のオクリモ

ノ」シリーズを現在6巻刊行しており、亜紀書房は「となりの国のものがたり」を現在3巻刊行している。他にも多くあるが、ここではひとまず4社のシリーズものだけを紹介する。

〈新しい韓国の文学シリーズ〉CUON社

- ①菜食主義者（ハン・ガン）、②楽器たちの図書館（キム・ジュンヒョク）、
- ③長崎パパ（ク・ヒョソ）、④ラクダに乗って（シン・ギョンニム）、⑤都市は何によってできているのか（パキ・ソンウォン）、⑥設計者（キム・オンス）、
- ⑦どきどき僕の人生（キム・エラン）、⑧美しさが僕をさげすむ（ウン・ヒギョン）、
- ⑨耳を葬る（ホ・ヒョンマン）、⑩世界の果て、彼女（キム・ヨンス）、
- ⑪野良猫姫（ファン・インスク）、⑫亡き王女のためのパウヴァーナ（パク・ミンギユ）、
- ⑬マンダー、サンダー、テンダー（チョン・セラン）、⑭ワンダーボーイ（キム・ヨンス）、
- ⑮少年が来る（ハン・ガン）、⑯アオイガーデン（ピョン・ヘヨン）、
- ⑰殺人者の記憶法（キム・ヨンハ）、⑱そっと静かに（ハン・ガン）、
- ⑲ショウコの微笑（チェ・ウニョン）

〈韓国女性文学シリーズ〉書肆侃侃房

- ①アンニョン、エレナ（キム・インスク）、②優しい嘘（キム・リョリョン）、
- ③七年の夜（チョン、ユジョン）、④春の宵（クォン・ヨソン）、⑤ホール（ピョン・ヘヨン）、
- ⑥惨憺たる光（ペク・スリン）

〈韓国文学のオクリモノ〉晶文社

- ①ギリシア語の時間（ハン・ガン）、②三美スーパースターズ最後のファンクラブ（パク・ミンギユ）、
- ③走れ、オヤジ殿（キム・エラン）、④誰もいない（ファン・ジョンウン）、
- ⑤あまりにも真昼の恋愛（キム・グミ）、⑥鯨（チョン・ミョングァン）

〈となりの国のものがたり〉亜紀書房

- ①フィフティ・ピープル（短編集）、②娘について（キム・ヘジン）、
- ③外は夏（キム・エラン）

全体的に女性作家の作品が多い。また従来の韓国文学の看板であった政治イデオロギーから離れた様々な感覚が取り上げられ、とくにフェミニズム文学、

クィア文学系列のものが目立つ。従来の「大文学」から「小文学」への転換である。「新しい韓国の文学」はおのずと「古い朝鮮の文学」をアンチテーゼとして規定している。ダイナミックな動きである。韓国女性作家たちがこうした動きに日本の女性作家も反応し、連帯し、刺激を与え合いながら呼応している。日本で注目を受けている川上未映子の芥川賞受賞作「乳と卵」(2007)や最近の『夏物語』(2019)、村田沙耶香の芥川賞受賞作「コンビニ人間」(2016)、『殺人出産』(2014)、『消滅世界』(2015)、『地球星人』(2018)などは韓国フェミニズム文学とも呼応し、連携と融合の線上にあると言える。そこには共通の敵が想定されている。言うまでもなく男性性である。プロレタリア文学以来の共闘なのかもしれない。

もちろん従前にも朴景利、朴婉緒、呉貞姫、梁貴子などの作品が紹介されたが、それらはあくまでも国家・民族・文化に縛れる男性文学(大文学)に付随するものとしてであった。要するに韓国文学の一部分(女性作家)としての紹介であり、文学商品としての機能はなかった。こうした従来の文学に風穴をあけたのが孔枝泳『サイの角のようにひとりで行け』(1993年)であろう。『菜食主義者』や『82年生まれ、キム・ジョン』の先駆になった作品である。そこにはもはや韓国独自の文化性が存在しない。女性の普遍性を訴えている。同作品は韓国女性が初めて自己の個別性を、男性を拒絶した「ひとりで行け」る存在として高々宣言したもので、いわゆる韓国フェミニズム文学の嚆矢とも言える。孔枝泳の感覚はもしかすると世界文学の中でも重要な意義を持つかもしれない。その意義とは男性に対する攻撃性と敵対性である。両性の分割という人類史上未曾有の過激性と破壊性である。性の崩壊の予見である。

しかし、こうした思想性には大きな代価が伴われている。『サイの角のようにひとりで行け』の女主人公たちは離婚したり、自殺したりする。『菜食主義者』の女主人公は精神病棟に入院している。『82年生まれ、キム・ジョン』の女主人公は解離性人格障害を起こして精神科に通院し、男性医師によって記録観察されている。チョ・ナムジュのもう一つの話題作「ヒョンナムオッパへ」の女主人公は睡眠薬と向精神薬を常用している。女性たちはいずれも大きな代価を払っている。韓国のフェミニズム文学やクィア文学が「K文学」として世界を牽引しているならば、こうした代価の引き換えであろう。ただで得られたものではない。被植民期体験、南北分断、朝鮮戦争、民主闘争、徴兵制度などによる数々の歴史的試練における「最終はけ口」が生み出した結果である。歴史的試練の「最終はけ口」となった韓国の女性が離婚、自殺、狂気を通り越してようやく勝

ち得た傷だらけの自己性なのかもしれない。それが日本で、あるいは世界で共感を得ている理由であろう。そうした意味で、私たちは従来の朝鮮文学・国文学・韓国文学ではない新しい「K文学」を獲得したのかもしれない。犠牲を払わない創造などないのである。



『サイの角のようにひとりで行け』(1998)



『菜食主義者』(2011)

しかし、被圧迫体験はしばしば内的共同幻想を生み出し、その抑圧の内的共同幻想は攻撃性となって他者へ移譲される場合が多い。韓国フェミニズム文学が持つ男性性に対する嫌悪と憎悪、熾烈な攻撃性は新たな分断と退行を生み出しているのも事実である。同じくチェ・ナムジュによる「ヒョンナムオッパへ」がそのよい例であろう。先鋭化された攻撃性がもたらした千々に裂かれた痛ましい韓国の姿がそこにある。連帯と融合を目指す知性（あるいは反知性）はもう一方で新たな退行と分断の反知性（あるいは知性）を生み出しかねないところがある。問題は錯綜する。

5 退行と分断／知性と反知性

チョ・ナムジュ『82年生まれ、キム・ジヨン』に快進撃やハン・ガン『菜食主義者』、孔枝泳『サイの角のようにひとりで行け』などのような韓国フェミニズム文学とクィア文学による日韓の連帯と融合の動きにも関わらず、また新しい「K文学」の台頭にもかかわらず、あるいはそうであればあるほど、その反動は一段と厳しくなる。いわゆる嫌韓本と嫌韓言説の隆盛である。嫌韓本と嫌韓言説がいつから日本で最も人気のある日本固有の「思想ジャンル」となったのかその起源を探るのは難しい。

私の在日30年の経験では、バブルの崩壊といわゆる「失われた10年」という長期不況が本格化し始めた1990年代の中期からであると思っている。サブカルチャー、特に漫画から始まったこうした嫌韓思想は歴史、思想、政治、文学の分野にも急速に広まっていった。韓国でもよく知られている小林よしのりの漫画本（ゴーマニズム）がそのよい例である。後の百田尚樹の一連の小説や歴史論もそうである。歴史教科書問題から端を発し、植民地近代化論や慰安婦問題を経て、最近では徴用工の問題としてさらにエスカレートしている。

他方、嫌韓本と嫌韓言説の表裏になっているのが、日本人の優秀さや偉さを鼓吹する歴史、文化、思想関連の日本自慢言説である。嫌韓本は書籍とネットが担当し、日本自慢言説は主にテレビが担当している。日本で暮らしていれば嫌韓本と日本自慢言説から逃れることはできない。書店に入れば、ネットに接続すれば、テレビをつければ、そのどれかが始まる。また余談だが、2008年に私は「鎖国ノススメ」という中国滞在記なるものを書いたことがある（拙著『翻訳の文学』に収録、世界思想社、2009）。砂埃が天地を覆う春の北京で3か月ほど滞在した私は砂埃の中で毎日抗日番組ばかりを観ていた。その滞在記に、「中国では砂埃と抗日番組から逃れることができない」とも書いた。それを做って言うと、昨今の日本では嫌韓本と日本自慢言説から逃れることができないであろう。自己への根拠なき過大評価の表出は基本的には退行がもたらす誇大妄想に属する。他者への根拠なき侮蔑は孤立した自己の純粋化（自閉）をますます強化していく。

もちろんこれらの現象は日本だけではなく、アメリカを筆頭とする現今の世界的な動きでもある。集団の深層心理（フロイトの用語で言うトリビドーもしくはid）が無暗に表出されている状態であろう。解体されていく自己を守ろうとする深層心理の巨大なエネルギーの発現とも思われるが、それは常に攻撃性と暴力性を伴う。反知性主義・反グローバル主義の情緒に支えられている。そうした抑圧された集団の深層心理の湧出はいずれ大きな災難を自己と近隣にもたらす可能性が高いであろう。これは自戒の対象でもあり、他戒の対象でもある。

さて、本学術大会の趣旨に戻ろう。依頼者から「我が国や東アジア、またはグローバルな世界変動における国語国文学の対応、もしくは現象及び相互関係」という長い課題を頂戴したが、それに答えるのは容易ではない。論理はさらなる矛盾を生み、真偽は錯綜し、知性と反知性は混合し、ソーシャルネットワークによって深層心理と表層心理の混交が行われ、退行と分裂、融合と連帯

が複雑に絡み合っているからである。これは朝鮮文学・国文学・韓国文学をめぐる複雑な内部状況でありながら、それを取り巻く周辺状況でもある。この難題について私にできることは自己の直感を述べることだけである。それが私にとっては最も真実に近いかもしれない。つまり、韓国醴泉で生まれ、本校（慶北大学校）国語国文学科を卒業し、在日30年の経験を通して、私は直感的にこのように思うのである。

7 国文学の進むべき道／韓国文学の進むべき道

あえて告白しよう。私の研究室の隅にあるガラス張りの書棚には最も大切にしている本を保管している。朴正熙『わが民族の進むべき道』である。その隣には『国家と革命と私』や『民族の底力』がある。稀覯本である『指導者の道』という革命時の豆本も置いてある。私がいつも眺めている書籍である。その次に敬意を表する書籍は陶南趙潤濟博士の『国文学史』である。趙博士は祖母（咸安趙氏）と同年生まれで、趙博士の生家は祖母の実家の裏手にある。趙博士のことは子供の時分から祖母から繰り返し聞かされ、生家にも無理矢理に連れていかれた。どうも趙博士と国文学は私の幼年記憶にこびりついている。日本に渡ってからは親日文学者として罵られている張赫宙などを中心に研究した。従って、この3人を借りて結論を述べる。

私たちには二つの道がある。国文学の道と韓国文学の道である。

国文学は不変の深層心理である。民族の核となるものがそこに内在しており、その原型は試練と苦難と挫折の歴史に包まれてきた朝鮮民族の心性に象られたものである。容易に発散できないまま凝固したものである。「恨」というのもその一つであろう。国文学の創始者である趙潤濟博士はそれを「慇懃と根氣」（은근과 끈기）と表現した。近代文学創始者である李光洙や親日文学の筆頭とされている張赫宙は、「朝鮮民族ほど悲惨な民族はない」という民族共同の悲哀体験として説明している。民族の傷痕とトラウマである。これが国文学の発生原点であり、それを捨てることはできない。国文学はいかなるグローバル時代においても内面の傷痕とトラウマとして内在するものである。内面の深層心理であり、いかなるものもそれを侵食することはできない。金洙映が大英帝国のイザベラ・バード・ビショップ女史と対決した「巨大な根っこ」（거대한 뿌리）の反動性である。しかしそれはあくまでも深層心理である。表層に噴出させてはならないものである。抑圧されるべきものである。封印しておくべきものである。

しかし、韓国文学は表層心理である。時代に左右されながら、諧謔性を帯びながら、韜晦をくり返しなが、現実に対応していくものである。時にはプロ文学を装ったり、親日文学を演じたり、国民文学や民衆文学、ポストモダン文学、時にはフェミニズム文学やK文学の表情を見せたりもする。風潮と時代に反応するものである。連携が必要で、拡散が必要で、増殖をくり返しなが、異質なものと融合していくものである。韓国のフェミニズム文学が起こした反響がそのよい例である。韓流やK-POPのように、増殖と融合をくり返しなが、他者を包摂していかなければならない。しかし、それはあくまでも表層心理である。それ自体が朝鮮民族の核になるものではない。あくまでも核の周辺を包む現実の顔なのである。表情である。韓国文学は絶え間なく挑戦していく運動力であり、その運動力は常に外に向かうものである。あたかも顔と表情が他人に向かうように。この運動力が深層心理（id）の破滅的な顕現を押さえることができるのである。

結論的にいえば、国文学の進むべき道と韓国文学の進むべき道はそれぞれ違う。国文学は朝鮮民族の変わることのできない深層心理で、その進むべき道は民族の奥深い内面の傷痕である。韓国文学は現実に対応する表層心理で、その進むべき道は変化無双でグローバルの混沌とした現象世界である。グローバルの中で生きていかざるを得ない。「K文学」でよいのである。いかに現状が苦しくても、深層からの耐えきれない誘惑があるにしても、融合と包摂と増殖を目指す多文化社会を私たちは堅持していかなければならない。いかなるグローバルな試練にも動じない国文学という強固な深層の内面があればこそ「K文学」の開かれた挑戦が可能なのである。試練のない成功は存在しない。

さらに別の言葉で言うと、国文学は退行と分断の世界である。封印し、抑圧されるべきものである。韓国文学は融合と増殖の世界である。助長すべきものである。他者（グローバル）からの退行と世界との分断によって国文学という自我の核が守られ、他者との融合と増殖によって個性としての韓国文学は豊かになっていく。したがって、私たちにはこの両者が同時に必要である。もちろん個人としてはそのどちらを探究しても構わないのである。これが直感に基づいた愚鈍な結論である。結論というより私から皆様への提言に近いかもしれない。